

2017 年度【第七回】学生観光論文コンテスト

テーマ B: 自然や文化を生かした魅力ある地域づくり～ナショナル・トラスト活動ができること、私の提案

実践型自然教育を生かした新しい観光形態

～カンボジアの子供たちに学ぶ～

高崎経済大学地域政策学部観光政策学科

荒井仁奈

岩下史

(代表者) 柏木杏奈

重田真佑

新海幸也

目次

1. 概要
2. 背景
3. 調査
4. 提案
5. まとめ
6. 参考文献

1. 概要

私たち日本人は、文明の発達によって先進国になり、便利で非常に豊かな暮らしが出来ている。特にデジタル面の発達は凄まじく、スマホをはじめとする電化製品は、生活をしていく中で必要不可欠な存在となっている。しかしその反面、豊かな暮らしと引き換えに、子供は自然と触れ合う機会が少なくなっている。自然と関わることから離れてしまうことで、子供は五感を鍛えることが出来ず、子供の心身の成長において影響を与えてしまうと考えられる。そこで私たちは、自然離れの要因を探るために統計データを用いて調べた。そして、そこで得られた結果から、いま私達のような若者が、自然を活かしたナショナル・トラストの活動で何かできることはないのだろうかと思い、自然の多い国であるカンボジアのツアーに参加をして現地調査を行った。調査では、子供達が自然とどのように関わっているか、自然と子供達の成長は本当に関わりがあるのか、を探ることを目的として行った。私達は、調査で得たことを参考とし、若者に向けたナショナル・トラストの活動のあり方を提案したい。提案するうえで、自然を「守る」・「つなぐ」・「伝える」をテーマに、静岡県島田市、新潟県南魚沼市・群馬県みなかみ町をモデルとして、いま若者が実践できる活動を考えることにした。

2. 背景

近年、デジタル化が進み、私たちの周りの環境は非常に便利で快適に過ごせるように変化してきた。このような環境の変化に伴って、子供たちが自然と触れ合う機会は少なくなっていると考えられる。自然と触れ合うということは、自分自身の心を大きく、豊かに成長させるものだと思う。今後の日本は高齢化が進むと予想されている。そんな時代を未来ある若者たちが引っ張っていくべきなのである。自分の住んでいる地域を愛し、さらに発展させていくという心を持った人間を育てていく必要がある。

しかし、今日の子供たちの周りの環境はそういった心を豊かに成長させる場所が提供されていないと考える。国立青少年教育振興機構が行った調査によると、年代が若いほど子供のころの自然体験や友達と遊ぶ回数が少ないということが報告されている。また、内閣府で行っている「青少年の生活と意識に関する基本調査」により、小中学生の休日の過ごし方がテレビを見る、テレビゲームをするなど、室内で過ごすことが増加しており、外遊びは減少しているといわれている。このように自然体験を幼いころから経験していないと感受性を育てることができず、物事を柔軟に捉えられなくなってしまい視野が狭くなってしまうと考える。自然と触れる機会が多いことで五感が刺激され、嬉しさや新たな発見、驚きなど様々な感情や好奇心・探求心が芽生えると思う。

子供の自然離れの大きい要因としてはスマートフォンやゲームが大部分を占める。文部科学省から発表された全国学力・学習状況調査の結果をグラフに示すと以下のようなになる。

平日にテレビゲーム(PC、携帯型ゲーム、従来型携帯、
スマホを含む)を1時間以上する人の割合

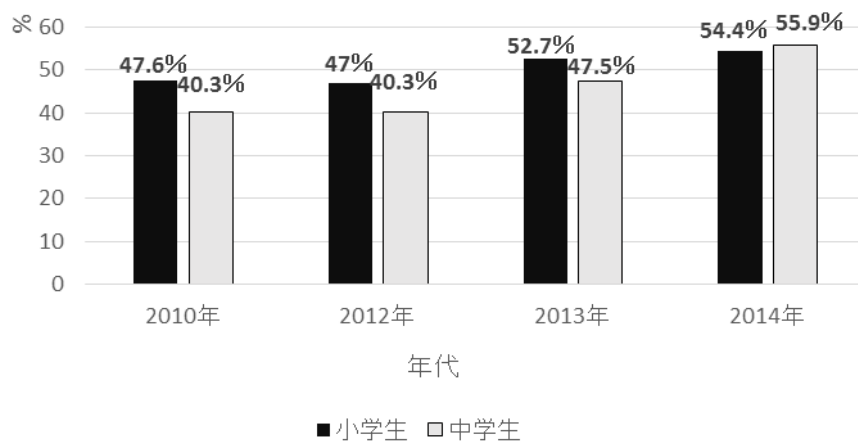


図 1 平日にテレビゲームを一時間以上する人の割合

出典：文部科学省 全国学力・学習状況調査の結果

平日にテレビゲームをする時間と教科の平均正答率
との相関関係(中学生)

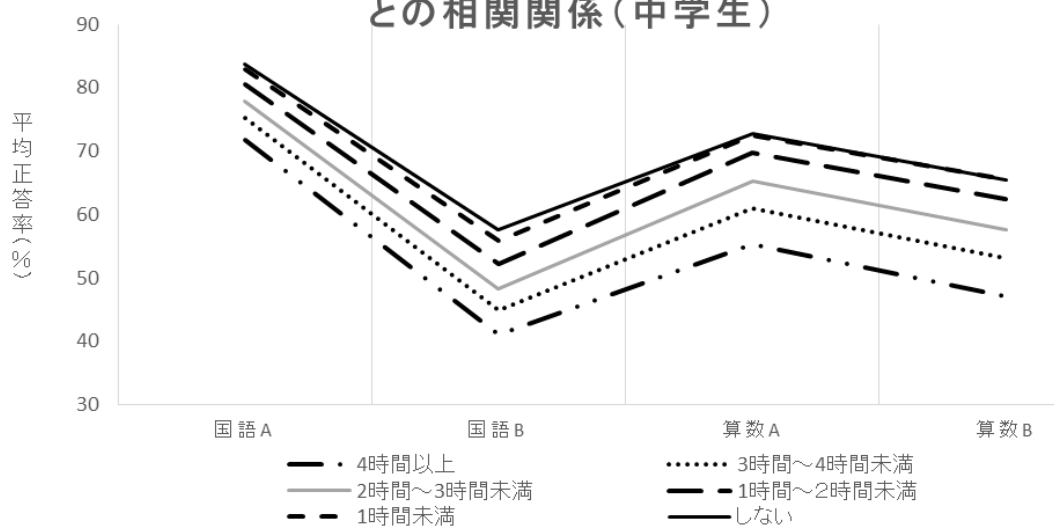


図 2 平日にゲームをする時間と教科の平均正答率との相関関係

出典：文部科学省 全国学力・学習状況調査の結果

示したグラフからスマートフォンやゲームを1日に利用する時間は年々増加傾向にあることが分かる。利用している時間が長いほど学力テストの正答率が低いことが分かる。私たちのアルバイト先(学童、塾)で小中学校の生徒たちに話を聞いてみたところ、休日にわざわざ家から出て自然と触れ合いたいとは思わないという回答が多かった。理由の多く

が習い事や塾が忙しい、虫が嫌だというものであった。

環境先進国・スウェーデンの大学教授は、こんな分析をしている。デジタル化が進んだ現在の環境の中で育った子供たちは外で泥だらけになって遊ぶことがないまま、大人になっている。その結果、他者との関わり合いが非常に苦手で、相手を認めることをせず、争いばかり起こす大人が圧倒的に多いという統計が出た。そのほかにも食べ物の味が分からない、美しいものを見ても美しいと思えないなどがある。

このような結果を受けて私たちはナショナル・トラストができることを提案する。

そこで私たちは実際に子供たちが自然体験ツアーを行っているカンボジアに調査に行った。

3.調査

私たちは、カンボジアのコンボントムに二日間滞在し、実際に行われている子供たちによる自然体験ツアーを調査してきた。私たちが訪れたのはカンボジアのコンボントムを拠点に活動する“Phum Asia”という団体だ。代表者は日本人なものの、属するメンバーのほとんどが十代もしくはそれにも満たない子供だが、彼らは共同生活をしながら「カンボジア世界遺産発掘ツアー」というものを観光客向けにしていくなための勉強、または実際にガイドする活動を行っている。そのツアーのメインともいえる遺跡が 2017 年 7 月にカンボジアで第 3 の世界遺産に認定された「サンボー・プレイ・クック遺跡 (Sambuor Prei Kuk ・ Praset Sambour Prey Kuk)」である。この遺跡は、カンボジア中央部にある都城遺跡で、シェムリアップの南東約 170 キロメートルに位置している。クメール語で「豊かな森の中の遺跡」という意味のこの遺跡は、6 世紀後半から 7 世紀始めからは東南アジアでは他に類を見ない八角形の形をした建築様式が発見されており、それらはサンボー・プレイ・クック様式と呼ばれ、アンコール時代の特徴的なクメール様式の礎となり、他の地域のモデルにもなっている。

Phum Asia の子供たちはこの遺跡の背景、歴史、逸話などについて学び、それらを外から来る観光客へと紹介するというのを一つのテーマとして取り組んでいる。今回私たちはその中の一人の子からツアーを体験させてもらった。“コンちゃん”の愛称で親しまれている彼女は、私たち日本人観光客に向けて「日本語」でツアーをしてくれた。この子供たちによるツアーという形式は運営する視点に立ってみてもメリットがある。それは観光客は子供たちによる解説の方がより聞き入って真剣に解説を聞いてくれるという点である。実際に私たちの中からも、通常の観光ツアーのような大人の解説よりも、子供の方が聞きたいという思いが強くなるという声が上がった。今回は特に慣れない日本語でたどたどしいながらも一生懸命に説明してくれている、という点もその傾向を高めた。



写真 1 子供による遺跡ツアーの様子



写真 2 サンボープレイクック遺跡

また“Phum Asia”の子供たちが行っている活動は遺跡ツアー以外にもある。彼らは自分たちの暮らすカンボジア土着の文化を観光客に向けて紹介する活動も同時に行っている。私たちはこの文化体験ツアーにも参加してきた。体験のメニューとしては、一つは子供たちによるカンボジア伝統舞踊の鑑賞である。カンボジアで言い伝えられている民話や伝説を舞踊という形で紹介し、観光客は楽しみながら歴史や文化を知ることができるとともに、子供たちがきらびやかな衣装や巧みな踊りの技術で舞踊を披露してくれるので、視覚や音で楽しむことができる。また、農業体験では実際に子供たちと一緒に農業を体験できる。ここ Phum Asia では、主な活動とは別に販売用のカシューナッツの栽培・加工も行っており、そのカシューナッツの管理は子供たちが主体となって活動している。ツアー客にはこの栽培のステップでカシューナッツの苗木に肥料を与えたり、水を与えたりする作業に加わることができる。現代人にとって普段することのない農業というものを楽しみながら体験することができる。さらに料理体験もできる。Phum Asia の拠点の近くには 30 分程度で行くことのできる市場がある。そこで子供たちに案内されながら必要な食材を買い、カンボジアで親しまれている家庭料理と一緒に作った。レストランなどでは味わうことのできない味を食べることができるだけでなく、実際に作る段階から体験できることは観光するという上で貴重な経験となる（※写真 4 参照）。

これらの活動を通して、ツアー客と子供たちの触れ合いというのもツアーを作るうえで重要なポイントであると感じた。一般的なツアーにおける売り手と買い手の垣根を超え、友人のように共同作業を共に行うことで親近感がわき、観光客に「また来たい」という思いを起こさせることに繋がる。



写真3 カンボジアの子供たちとの触れ合い



写真4 料理体験の様子

私たちが“Phum Asia”活動に参加して体感したことは、幼い頃から自然体験に触れることの重要性と、主体的に学ぶことの子供に与える影響力の大きさである。カンボジアの子供たちは自然体験や学習を通じて、自分たちの暮らす自然の価値を自ずから理解しようとし、それを他者へ伝える役割を担えるまでに成長する。ただ与えられる勉強をするのではなく、目的ある学習は子供たちを主体的にし、子供たちの精神的自立・精神的成長を促す。

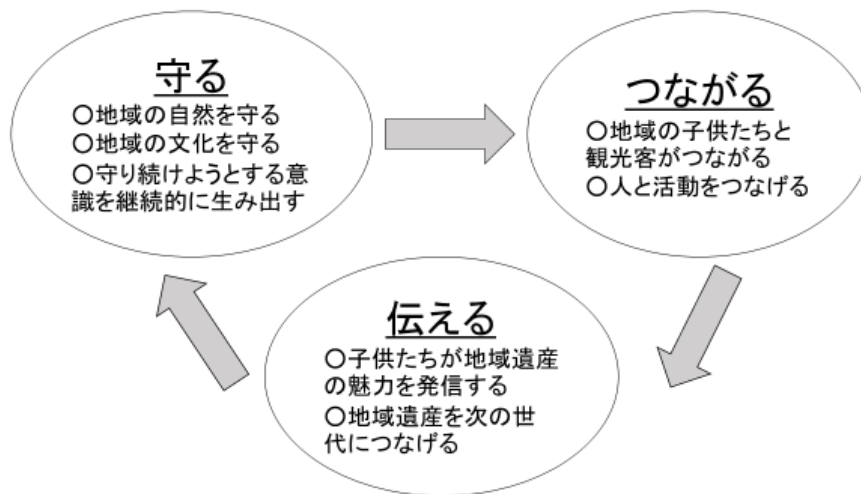
また紹介する観光資源も自分と遠く縁のない観光地などではなく、自分の住む生活圏にあるものをツアーとして提供するため、馴染み深く愛着があることから、自分の暮らす地域・文化に誇りを持つことができる。観光資源のガイドとしてその土地で暮らしてきた住民以上にふさわしい人物はいない。

このカンボジアでの調査を受け、私たちは以下のことを提案する。

4.提案

提案『子供たちと守り、つながり、伝える地域づくり』

私たちが提案するのは、子供が主役・大人はわき役の、教育と観光を合わせた活動である。またこの活動内容は、公益財団法人日本ナショナル・トラストの取り組みの3本柱である“守る・つなぐ・伝える”に沿ったものとなっている。



はじめに既存のナショナル・トラスト活動に地域の子供たちを参加させ、その地域の自然や文化に触れ、地域遺産を受け継ぐ意識を生み出す。そして、「そこで暮らす子供たちと一緒に活動し、その地域の魅力を体験する」ということをひとつの観光プランとすることにより、今度はその子供たちが伝える立場となって、大人のサポートを得ながら、国内外の人たちに地域遺産の魅力を発信していく。

活動目的

この活動は以下4点の目的を果たし、社会問題・教育・地域振興などの各分野でも意味を持つものである。

- ①現代の子供たちの自然離れを解消する。
- ②語学力やコミュニケーション能力、主体性など近年必要とされている能力を養う。
- ③新しい観光形態を創り観光の幅を広げ、地方に観光客を誘致する。
- ④地域遺産を守り、継承する。

守る

まず、実際に子供たちをナショナル・トラストが行っている様々な自然保護活動などに参加させることから始める。すると子供たちに、その経験を通して、自然や文化など今まで気づくことのなかった数々の地域遺産の魅力を発見し、学ぶ機会を提供することが出来る。また、自らが活動に参加し自然保護や文化継承に貢献したことによって、その魅力をいつまでも守っていこうという意識が生まれ、それが“みんなで自然を守る”ことへの第一歩につながる。

これは地域遺産のある地域やそれらを保護するナショナル・トラストのためだけにとどまらず、自然離れが問題視されている現代の子供たちにとっても、非常に意義のある経験である。背景でも述べたように、近年のスマホやゲームなどの急激な発達の子供たちの自然離

れにつながり、子供たちは画面と向かい合う時間を過ごすことが増えた。そしてその時間があまりにも長すぎてしまい、様々な能力の低下にまで至ってしまった。そんな現代の子供たちに必要なことは、画面の向こう側の世界ではなく現実の世界で、キャラクターではなく自分の体を動かし、本物の自然に触れるという経験である。

学校やインターネットで学ぶのも良いが、経験するということは実際の地域の魅力を知るには何よりも効果的だ。百聞は一見に如かずという言葉があるように、経験に勝る学びは存在しない。まずは経験させること。それが“守る”という意識を生み出し、行動へとつながるのである。

つなぐ

経験して学んだ（インプットされた）知識への理解をより深め、確実なものにするために必要とされるのが、他者に伝えるということ（アウトプット）であるのは言うまでもない。しかし思い返せば、私たちが小中学生の頃、課外学習という名で行ってきた活動は、全てインプットであった。学校の外に出て地域の人と直接関わり、教わることはあったとしても、自分たちが学校の外で教える立場になった経験などほとんどなかった。グローバル人材やコミュニケーション能力が叫ばれる近年、どうして若いうちからそのような経験をさせる機会が存在しないのだろうか。子供たちが“守る”意識を持ったとしても、それを“伝える”機会を提供しなければ、それは意味を持たなくなってしまう。守り続けるために伝えていくには、子供たちと他者を“つなぐ”ことが必要となる。子供たちと他者がつながり共に守れば、その経験から生まれた地域遺産の魅力を守る意識も次の世代へとつなげることが出来る。

伝える

子供たちが、守る意識を持ち他者とつながる機会を得れば、いよいよそれを実践させる。自然体験や地域文化などの経験から学んだことを、子供たち自身が外から来た人に直接伝えるということだ。ここで言う外から来た人の中には、もちろん海外からの観光客も含まれる。そうすることで、子供たちの“知る”は“理解する”にレベルアップし、子供たち自身が地域遺産の魅力を“伝える”ことがさらに次の“守る”につながっていく。自然保護や文化継承の視点から見ても、観光の視点から見ても、「そこで暮らす子供たちと一緒に活動し、その地域を体験する」というのは魅力ある仕組みだろう。また、何を伝えたいのか、興味を持ってもらうにはどうしたら良いか、どうすれば伝わるのか。こういったことを試行錯誤し実践する機会が多ければ多いほど様々な能力が養われるため、この国の将来を担う現代の子供たちには積極的に与えるべきである。

上記の守る、伝える、を子供たちに実践してもらうために私たちは中学生を対象にナショナルトラストによってできることを提案する。またナショナル・トラストによって保護されている文化・自然を持つ地域が対象だとする。このようなことを実際に行っている地域の具

体例を以下に示す。

(1) 静岡県 の 島田市 ではトラストトレインという SL 列車が保存されている。この保護遺産では親子ボランティアが行われており、活動を周知するためにパンフレットの配布などを行っている。そのほかにも子供向けに SL 磨きや車掌アナウンスができるなど貴重な対体験ができる。この活動を周辺の中学校に知ってもらい、ともに取り組むことが私たちの提案である。一年生の間にはトラストトレインの清掃や修復、運行補助といった普段のナショナルトラストの方たちが行っていることに参加し、ボランティアの活動では行われていないが、ナショナルトラストの方たちが行っているパンフレットの配布などを行う。そして二年生になるとその保護遺産の歴史やナショナル・トラストによって保護された経緯などを学び、さらには保護されてはいないが身の回りにある自然や文化について子供たちが発見したものをツアーとして取り入れる。島田市の場合では緑茶化計画というのが行われているためお茶摘みを体験する。これによって日本の文化を体験し、子供たちは普段何気なく生活しているがお茶畑の良さなどに気づくことができる。また、大井川という川があるからそれを利用して夏は蛍を見たり、古い町並みを利用してスタンプラリーを行うなど自分たちで考えてもらったツアーを中学三年になって実践する。そのためにはナショナル・トラストの方たちはツアー参加客を募らなければならない。しかし、こうすることによって島田市には観光客が増加し、また自然を生かしたまちづくりを行うことができる。また、気づくことができなかった地域の魅力を生かすことができ、より良いコミュニティーが形成され则认为る。また中学生がツアー客にガイドをすることは中学生のコミュニケーション力向上が期待できる。このようにこれからのナショナル・トラストには遺産を発信し、活かし、観光に結び付けることができる可能性がある。

(2) 新潟県南魚沼市・群馬県みなかみ町にはナショナル・トラストに登録されている巻機山がある。この活動は 1950 年代後半以降の登山ブームの影響により登山道に沿う雪田草原が破壊され広範囲にわたって、裸地化・土壌侵食などが進行し自然環境の構造的破壊と荒廃が進んでいた。こうした状況を危惧した公益財団法人日本ナショナル・トラストが景観を回復するためにボランティアが活動を開始した。2012 年までの作業で、植生復元を計画した範囲での作業をほぼ終え荒廃していた環境と景観は見事によみがえった。その成果は、延べ 1500 人を超える国内外のボランティアによる力が集結したものである。こういった活動には行政、地元、外敦団体、大学などと連携している。そこに地元の中学生も参加させようというのが私たちの提案である。こういった自然体験を子供たちに提供し学んでもらい、アーク客に伝えてもらう。自分たちの住んでいる地域の歴史や現実と向き合うことにつながり、今までの生活を見直すきっかけにし、持続可能な環境とは何かを主体的に考えてもらう。また周辺地域の文化を含んだツアーを作ることによってリーダーシップをも培ってもらうことが望みである。

5.まとめ

私たちは以上のように、自然と触れ合う機会が少なくなってきた日本の子供たちが多くいる事実に着目し、自然と関わって自然を保護し守っていくことのできる提案をした。

現代の多くの子供たちはスマホやゲームといった電子機器によって家の外に出る機会が減ってきていることを私たちは身をもって実感していることも大きい。なぜなら私たちもその世代上にいるからである。小中学生の時にゲームをしたいから外で遊びに行かないという人は私たち世代には沢山いる。その事実は背景のデータからも読み取ることができる。

そのような背景から私たちは、子供たちが今の環境に適したナショナル・トラスト活動をしていけたらと考えるようになった。活動を提案するには、まず日本ではない自然の多い国カンボジアで調査をする必要があった。カンボジアで現地調査をしていく中で、実際に自然と触れ合っている子供を目の当たりにすることができ、子供時代に自然と深く関わることで、心身を成長させられる影響力があることが明確となった。そして子供たちは自分の住んでいる地域・文化に対して価値を見出していた。

このような調査の結果を踏まえることで、「子供たちと守り、つながり、伝える地域づくり」という提案を考えることができた。

日本の地域遺産を守っていくうえで必要なことは、子供と自然・文化を相関させ、自然離れの解消、基本的なコミュニケーション能力スキル、子供たち主体の新しい観光開発、地域遺産を守る意識である。これをナショナル・トラストの活動と結びつけることで、再び日本人が自然を愛することのできる国になるのではないかと私たちは考えている。これからの未来を担う子供たちのために、今できる最大限のことをしなければいけない。そして私たちの提案は、日本の自然・文化を保護し伝えていく希望となりうるのではないか。

6.参考文献

公益財団法人ナショナル・トラスト

<http://www.national-trust.or.jp/>

国立青少年教育振興機関 「青少年教育に関する法令・答申・調査研究・統計等」

<http://www.niye.go.jp/youth/book/files/common/title.gif>

文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_gakushu_index/toushin/13151

91.htm

UNESCO World Heritage Center <http://who.unesco.org/en/list/1532>